東京民研からの学校再開に向けた緊急提言（version1） 2020 年 5 月 28日

子どもの命と成長への願いを大切にした学校再開へ

はじめに

３月突然の休校、それが三か月にもなろうとしています。長い教育の歴史の中で一度も経験したことのない事態です。９月入学も検討されています。再開しても、教室環境、時程、授業形態・内容、すべてが今までとは異なります。指導要領の内容を網羅的に教えるのは無理ですし、文科省もそうした要求はしていません。

今、私たちには、傷ついた子どもの思いをどう受け止めたらよいのか、そして、どんな学習を子どもたちに用意しなければならないのかを考えてきました。この提言は、同じ悩みを持つ全都の仲間の再開後の教育活動の参考になればという思いで作成しました。

かつて経験したことのない事態の今だからこそ大切にしたいこと・・・

① 感染予防に万全を尽くし、子どもの命と健康が守れる学校の環境
② 子ども一人ひとりの心と体をあたたかく受け止めたい
③ 学ぶ内容を大胆に絞り込み、大事なことをしっかり押さえた授業（限られた時間だからこそ、学ぶことの楽しさを子どもたちが味わえる）をつくりたい

＊管理職を含め、常勤非常勤、職種の垣根を越え、全ての教職員の思いや考えを出し合って取り組みましょう。
＊保護者の様々な心配事や願いを受け止め、地域とつながる視点も大切に。

校庭を走り回る子どもたち、走り回るのは子どもの特権。休み時間に仲間と語り合う中学生。そうした子どもたちが、体を思いきり動かすことも、仲間と触れ合うこともできず、みんなで学びあうこともできないまま、一日のほとんどの時間を、家庭という限られた空間の中で過ごさなくてはなりませんでした。

多くの子どもたちがゲーム漬けの生活を送りました。テレビと携帯やスマホでの時間が生活の多くを占めました。単調な生活、人間関係の狭さ、活動の少なさ、核家族の中で逃げ場のない、緩衝地帯のない空間での生活が三か月も続いたのです。伸び盛りのしなやかな子どもの体です。三か月に及ぶほぼ家庭での生活が子どもの体と心に与えた影響が心配です。

体内時計の狂い、生活リズムの乱れもあることでしょう。体の変調が心の変調につながるのは明らかです。

「心がコロナにかかった！学校に行きたいけど、感染が怖い！受験が心配！友達に会いたい！」という中学３年生の切実な思いを受け止めて、学校の再開を進めていきましょう。

かつてない事態です。今までの経験が役に立たないこともあると思います。いくら対策をしても、本当にこれでよいのかという不安も残ります。新型コロナに対する知見をもとに、教職員のアイデアを出し合っていきましょう。命と安全のこと、子どもの心と成長のこと、授業のこと、行事のことを本音で話すことで、学校が今までよりもう一歩「子どものための学校」に近づくかもしれません。私たち教職員が、もう一歩だけ「子どものための教師」に近づくかもしれません。困難な時だからこそ、きっと乗り越えた先には希望があります。

長い取り組みです。ゆっくり焦らず、着実に進んでいきましょう。
「私が倒れたら、子どもたちはどうなるのかと思うと、電車に乗るのも不安です」そう話してくれた先生のこの言葉は、すべての私たちの思いです。本格的に学校が動き出します。まだ始まったばかりです。新しい事態も起きるでしょう。

たとえどんなことが起きたとしても、学校を支える私たち大人の心と体の健康、笑顔が子どもたちを支えます。どうか、無理をなさらないでください。

Ⅰ　命と安全、ここからスタートです

今学校再開に向けて様々な取り組みが行われていますが、まず、最初に考えるべき課題は、子どもの命と安全です。規制の解除が進み、経済と感染との兼ね合いを取って、徐々に規制を緩める。再び感染が拡大傾向を示したら、再度規制を強化する。そうした流れで進もうとしています。学校の再開と、経済活動の再開と異なる点は、最大限に「命と健康を守る側」に立って再開に向けた準備を進めるという点です。

〇国、都道府県レベルの対策を基に学校の実情に合った対策と環境を、教職員のみんなで作りあげていきましょう。

そのための基本的で具体的な指針を行政は出すべきです。また学校が必要な“もの”と“人”は教育委員会が準備をして学校から要請があればすぐに用意できるようにすべきです。保健室に消毒液もマスクもないなどということは、もう絶対に許されません。

〇子どもたちには、ウイルスに対する正しい知識と予防のための生活習慣を身につけるための取り組みを進めましょう。

このことが心の健康を保つことや偏見や差別をなくし、お互いの人権を守ることにもなります。

年に 10 数回もの避難訓練、保健指導など、私たちは、「命を知る、命を守ること」を、教育課程の中で位置づけてきました。命と健康という土台の上に他の教育活動があるのです。学校再開はここから始まります。

突然の解雇通告。営業自粛で膨らむ負債。経済的に立ち行かなくなった家庭も少なくありません。その影響にさらされている子どもたちです。

ただでさえ、日本の子どもの 7 人に一人は貧困の中で生活しています。食べものはあるのでしょうか。偏った食事になってはいないでしょうか。給食が救い、子ども食堂で栄養のバランスをとっていた子どもたちは、休校期間中は何を食べているのでしょうか。食という土台さえ脅かされている子どもたちの栄養、発育、健康にしっかり心を配りたいと思います。

Ⅱ　今の子どもをあたたかく受けとめて安心できる教室に

「心がコロナにかかった！」そんな不安をもつ子どもたちの心と体をしっかりと受け止めましょう。

家庭という狭い空間で単調な生活を強いられてきた子どもたちです。三か月の子どもの気持ちのありようは、一人ひとり違います。友達の笑顔が先生のまなざしが、どんなにか子どもを安心させ、励ますことになることでしょう。「友だち大好き」「学校大好き」「先生大好き」そんな安心して過ごせる学級をつくることから始めていきましょう。

今は子どもを抱きしめることはできませんが、その分、思い切り心で抱きしめましょう。「先生に会えてうれしい」「あなたを待っていましたよ」と。

授業を進めなくてはと焦る気持ちもありますが、まずは、学校が始まってよかったと実感できるよう、できる限り子どもと話す時間をとりたいと思います。子どもと直接向き合える学級活動の時間が多くなっていいのでしょう。

子ども同士がつながる、そして笑顔が教室にあふれる、それを見つめる先生のまなざし。そんな教室に。

これからは、学校での生活が日常になります。朝起きること、登校、学校での遊びや授業、下校そして家での生活、就寝、こうしたリズムができるように、保護者とも手を取り合って、子どもの生活と学びを創っていきましょう。

何しろ、学校に行かないことが当たり前の生活が長く続いたのです。幼稚園・

保育園の時から、こんなことは誰も経験したことはありません。学校再開で登校することに、一人ひとり葛藤があることでしょう。その葛藤の質は様々です。

「あなたに会えてよかった」と、あたたかく子どもを包み込むと共に、子どもの葛藤や悩みを見つめる確かな眼差しが必要です。

そして忘れてならないのは、三か月も学校抜きで育てた保護者の子どもへの思いです。心配や不安はしっかり受け止めたいと思います。

Ⅲ　学ぶ楽しさと確かな学力を
～大切な内容に大胆に絞り込みましょう～

学校再開に当たって時差登校を計画している学校も多いでしょう。子どもたちも、「友だちに会える」「先生に会える」と心待ちにしていることと思います。子どもたちとじっくり学習できると期待をふくらませている先生方も多いのではないでしょうか。

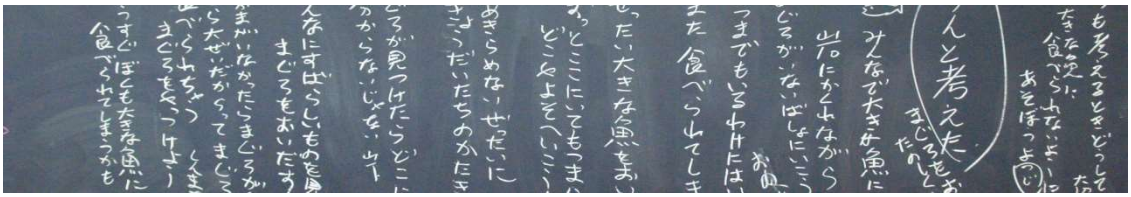
とはいえ、コロナ流行のために学校を始めることができず、すでに二か月が経過しました。今後、第２、第３のコロナ流行の波が来ることも予想されます。そうしたことを考えると、学習の時間は、例年のおよそ三分の二になるでしょう。その短い時間の中で、学習指導要領の全ての内容を詰め込むのは、子どもにとっても教師にとっても過密で負担の大きなものになります。

また、安易に「土曜授業を増やす」「夏休みなどの長期の休業日を減らす」などの対応で、学習内容を消化しようという動きもあります。ますます重い負担に苦しむことになるのではないでしょうか。

ではどうしていくのでしょう。私たちは、次のように考えます。

①学習指導要領の標準時数の確保にとらわれずに時数の見直しを…

安易に土曜授業を増やしたり、週時程を過密にしたり、夏季休業を短縮したりすることは、子どもと教師の負担を増やすことにつながります。また、時数を増やさないまでも、短い時間の中で無理に現行の学習内容を詰め込むことも問題です。今年度の時数をどう設定するかは大きな課題です。一つの学校や一つの自治体だけで見直しを図るのは難しいでしょう。文科省に対し大きな見直しを働きかけていきましょう。



②今年度の学習内容の大胆な見直しを…

現在の状況から見て、学習指導要領に示された内容を全て扱うのは困難です。中には、学習内容を３分の２程度にしぼるのが適切ではないかとの意見もあります。教科学習では、その学年の子どもたちに本当に身につけさせたい力とは何か、考えましょう。教科書を読み、子どもたちに「これだけは」という単元や教材を選りすぐりましょう。そうすれば、逆に、これは削除しよう、軽く扱おう、という単元や教材が見えてきます。そういう単元や教材は、思い切って大胆に削減しましょう。

大切なのは、子どもにとって本当に価値のあるもの、今学ばなければならない大切な内容を洗い出し、それをじっくりと学べるような指導計画をつくっていくことです。

たとえば、算数の「分数」はただでさえつまづきやすく、困難な学習の一つです。もっと時間が欲しいと思っている先生方も多いでしょう。短い時間で進めたら、分数が分からない、算数嫌いという子どもが出てこないでしょうか。それなら「時計」の学習は子どもたちの日常の生活と結びつけて取り上げ、授業時間からは大胆に割愛して「分数」の学習時間にあてる。そうした内容の検討も各教科で必要となります。

③内容によっては、次年度実施が適切な場合があることも視野に…

教科指導全体の検討の中で、次の学年で力を入れて教えてもらおうという単元や教材がでてきます。それは、次の学年でしっかり指導してもらうような計画を作成しましょう。

たとえば、6 年生の場合、特に教科としての「外国語」などは、中学でしっかり指導してもらうこととし、小学校では、「英語嫌いをつくらない」を目標にしてはどうでしょうか。年度をまたいでの計画でもいいと文科省が認めています。

④今年度の教科外活動（行事など）の精選・実施は、子どもたちへの成長の意義を考えて…

行事を減らして授業時間の確保を目指す。そんな動きがでています。しかし、子どもたちが学ぶ場は、教科だけではありません。教科外の活動を通しても大きく成長します。たとえば子どもたちは、運動会や遠足などの学校行事を通して、全力をあげることの大切さや力を合わせることの大切さを学びます。また、自分たちで考え、つくりあげた喜びを体感していきます。時には、自分を見つめ自分が乗り越えるべき課題を見つけ、友だちのよさを再発見する子どもも生まれてきます。「一つの行事を終えたら、子どもたちが見違えるような成長を見せた」という経験は、多くの先生方がもっていらっしゃるのではないでしょうか。

それらをふまえると、行事を簡単に切り捨てたり、簡素化したりしていいのか、考えさせられます。学校としての姿勢が問われる場面です。管理職をふくめた教職員が「子どもたちの成長に必要な行事は？」という視点で意見を出し合いましょう。

⑤子ども、保護者、地域の願いを受け止め、教職員の知恵を出し合った学校運営を…

学校が再開されると、子どもたちが、「休み時間おにごっこしたい」「先生給食一緒に食べてよ」「宿題多すぎだよ、やになっちゃう」「先生とおしゃべりするのだーい好き」と、教師の机の周りに集まってたくさん話しかけてくるのではないでしょうか。子どもたちは、長い休校で積もり積もった不安やストレスをぶ

つけてくることでしょう。その中には素通りできない子どもの訴えが含まれていると思います。そうした子どもたちの心の状態に寄り添っていける教師のゆとりも必要だと思います。

　またこの休校期間中、保護者も、子どもたちと過ごす時間が増え、生活や学習について悩みや不安を募らせていることでしょう。こうした悩み・不安を取り除いていくことも教師にとって大切な仕事になっていくのではないでしょうか。

　経験したことのないとんでもない今だからこそ、「学校と地域保護者と手をつないで」という視点を大切にしていきたいと思うのです。

　子どもの願いがクラスを変え、子どもの願いが学校の営みに反映される。保護者が安心して子どもたちを登校させることができる。そんな学校にしていきたいものです。

～コラム～

オンライン授業をどう考えるか？？？

　コロナ流行に伴う休校措置の中で急速に広まったのが「オンライン授業」です。ライブ授業を公開したり、動画などを YouTube にアップしたりするなど、苦労されている先生方も多いことでしょう。

　このような状況の背景にあるのは何でしょうか？

　「とにかく、学習指導要領に示された内容を今年度中に終わらせたい。そうしないと、高校入試に間に合わない」「学校は子どもたちの学習を保障する取り組みが何もできていない。考えられる何かをやっている姿勢を見せる必要がある」などの焦りもあると思います。一方で、「ＧＩＧＡスクール構想（『Global and Innovation Gateway for All』の略－文科省が主導している『１人１台端末及び高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備して、公正に個別最適化された学びを実現させようとする試み』）」が、発表されたが、この機に一気にその方向を進めてしまおう」という意図も感じられます。

　しかし現状は、「技術的な壁が高いこと」や「インターネット環境がある家庭

とない家庭で大きな格差が生まれていること」などの問題があげられています。また、「子どもたちが、ネットを通して送られてくる内容に基づいて学習しているかどうかチェックすることができない」「子どもの理解度・定着度を測るすべがない」など、現状のネット環境が片方向であり、双方向で行うのが難しいという問題があります。

しかし、たとえ双方向でオンライン授業ができたとしても、教師と子どもが対面して行う授業の良さにはるかに及ばないのではないでしょうか。子どもたちのわずかな表情の動きの中からその思いを汲み取り、励ましたり助言したり共感したりというのは、現場にいる教師ならではということでしょう。また、授業の中で生まれた問題を、子どもたち同士で考えを出し合いながら解決したという満足感や空気感は何事にもかえられないよさがあるのではないでしょうか。

社会の流れの中で、教師がＩＴ技術を身に付けていくことは大切なことだと思います。しかし、オンラインで送られたメディアを子どもたちが視聴したとして、それで、その内容を学習したとするのは無理があるでしょう。あくまで、教師と子どもたちが対面し教授と学習の過程が組まれることを「授業」として位置づけたいと思います。

オンライン授業は現状ではやむにやまれずに行っている側面はあると思います。しかし、それは「本来の（対面型の）授業」の補完にはなっても、代替にはならないことを銘記すべきだと思います。

先に述べたように、内容の精選を通して、人々が歴史の中で培ってきた価値のあることを、教師が提示し、みんなで話し合い、一人ひとりの子どもが自分の言葉で理解していく。そんな積み重ねで学ぶ喜びが育っていくのでしょう。

＊

ある教育書にこんな一節があります。「授業過程は、一面からみれば、文化遺産の伝達である。しかし、より内面的にとらえれば、授業は、文化財の習得をとおして生徒の諸能力が発達していく過程であり、教材を媒介とする教師の働きかけ（発問とか教示）や生徒相互の影響のもとで生徒が自己発達をとげていく過程である。また、これを教師の側からみれば、文化遺産である教材を使って子どものなかにある可能性を引き出し発展させる過程ということができる…授業は教育実践の中心をなすものであり、教育研究のすべての出発点であると同時にゴールでもあるということができる」。（『現代教育学の基礎知識』（Ｉ）1979年　有斐閣ブックス）

○おわりに

文字通り教職員すべての協力がなくては乗り越えられない事態です。今までとは違う取り組みや課題が待っているのですから。

今までと違う清掃の仕方、今までとは違う調理の仕方、今までとは違う物品の発注、今までとは違う保健室の対応。少数の職種、一人職種の方の思い、願い、不安、そうしたものを共有しましょう。

みんなで支えあって、共感して、思いを出し合って乗り越えていきたい。

きっと学校も、私たちも、子どもたちも前に進める

私たちはそう信じています

今ほど、学校に柔軟で臨機応変な教育活動が、求められている時はありません。

この提言は、かつてない不確実で困難な条件のもとで、子どもの発達と学びをつくるために努力されている教職員の方に、少しでも参考になればという思いでつくりました。学校が再開されても、コロナ感染症の再流行の可能性もあります。どのような事態になろうとも子どもの健康と学びを守る道を探っていきましょう。

ご意見や実践をお寄せください。

寄せられたご意見と実践を基にして、子どもの笑顔と確かな学びにつながるよう、この提言の改訂版を準備していきたいと考えています。

発行・東京の民主教育をすすめる教育研究会議（略称・東京民研）

「東京民研」は、各教科をはじめ２６の研究部会を持つ東京都教職員組合の教育研究組織です。

〒102-0084 東京都千代田区二番町 12-1 ｴﾃﾞｭｶｽ東京・全国教育文化会館 4 階

TEL：03(3230)0841　FAX：03(3262)9705　E-mail：tokyo-minken@educas.jp